

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

環北太平洋域諸言語の語彙的接辞

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 呉人, 恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00006021

環北太平洋域諸言語の語彙的接辞

呉人 恵
(富山大学)

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1 はじめに | 5.1.1 所有・存在・欠如 |
| 2 語彙的接辞の分類 | 5.1.2 動作動詞 |
| 3 コリヤーク語 | 5.1.3 - li - グループ |
| 3.1 名詞語幹につく語彙的接辞 | 5.1.4 量/質/サイズ |
| 3.1.1 P項に接続する語彙的接辞 | 5.1.5 その他 |
| 3.1.2 S項に接続する語彙的接辞 | 5.2 動詞語幹につく語彙的接尾辞 |
| 3.1.3 方向名詞に接続する語彙的接辞 | 5.2.1 モダリティ |
| 3.1.4 道具名詞に接続する語彙的接辞 | 5.2.2 階層的埋め込み構造 |
| 3.2 動詞語幹につく語彙的接辞 | 6 スートカ語 |
| 4 ツングース語族 | 6.1 名詞語幹につく語彙的接辞 |
| 4.1 名詞語幹につく語彙的接辞 | 6.1.1 P項に接続する語彙的接辞 |
| 4.2 動詞語幹につく語彙的接辞 | 6.1.2 S項に接続する語彙的接辞 |
| 5 エスキモー語 | 6.2 動詞語幹につく語彙的接辞 |
| 5.1 名詞語幹につく語彙的接辞 | 7 おわりに |

1 はじめに

本稿は、シベリア北東端カムチャツカ半島北部に分布するコリヤーク語 (Koryak: チュクチ・カムチャツカ語族) を中心に、北東アジアのウデヘ語、エウエン語 (いずれもツングース語族)、北米のエスキモー語¹⁾(エスキモー・アリユート語族)、ヌートカ語 (南ワカシ語族) を取り上げ、それぞれの言語が有する動詞概念を表わす語彙的接辞 (lexical affix) の形態論・意味論的類似性と相違性を比較対照することを目的とする。

日本列島、朝鮮半島から北東アジア、さらにはベーリング海峡を越えて、北米の北西海岸からカリフォルニアにかけて分布する諸言語は、その類いまれな系統的・類型的多様性によって、「環北太平洋域 North Pacific Rim」という連続体として捉えられることがある (宮岡 1992: 5²⁾)。なかでも注目されるのが、北東アジアの古アジア民族 (the Paleoasiatic) と北米先住民族とのつながりである。古アジア民族は、かつて旧大陸からいったん新大陸に渡り、再び北東アジアに逆戻りした人々のグループであるとして、「シベリアのアメリカノイド Americanoids of Siberia」 (Jochelson 1928:43) と呼ばれ、北米先住

民族との関係が示唆されている。

古アジア民族が話す諸言語は、系統的にも類型的にも相互に異なっているにも関わらず、新参のウラル語族やアルタイ諸語とは異なり、古くからこの地域に分布していたとして、「古アジア諸語」としてひとまとめに分類されている。この古アジア諸語には、西からケット、ユカギール、チュクチ・カムチャツカ語族、エスキモー・アリュート語族、ニヅフ語が含まれる。これらの諸言語のうち、北東アジアと北米の言語のつながりを考える際に、とりわけ重要な意味を持つのは、チュクチ・カムチャツカ語族である。新旧両大陸の間に位置するこの語族は、北東アジアの言語とも北米の言語とも類似性を有することが知られており、新旧両大陸の「橋渡し」あるいは「要」的言語と位置づけられている（渡辺己 1992:149）。

チュクチ・カムチャツカ語族は、隣接するエスキモー・アリュート語族との関係について、系統と影響の両面から検討されてきただけでなく、広く北米インディアン諸言語との、母音調和、子音結合、反転動詞などの現象をめぐる類似性についても指摘されてきた³⁾。

チュクチ・カムチャツカ語族と北米の諸言語との関係を論じるにあたって、取り上げるべき言語現象には枚挙にいとまがないが、本稿では、統合度の高い言語に観察される語彙的接辞を取り上げ、筆者がこれまで調査してきたコリヤーク語を、新旧両大陸に分布する環北太平洋域諸言語と比較対照する。コリヤーク語以外に対象とする言語は、同じく北東アジアに分布するウデヘ語、エウエン語、ベーリング海峡を隔てて北米に分布するエスキモー語、ヌートカ語である。

これまで、語彙的接辞を北東アジアから北米までの環北太平洋域という広がりの中で比較対照する試みはなかった⁴⁾。語彙的接辞は、とりわけ北米諸言語に多く観察される複統合性 (polysynthesis) の問題とも密接に関連している。したがって、ここで環北太平洋域という連続体の中でそのありようを探ってみることは、決して無意味ではない。

2 語彙的接辞の分類

ここではまず、本稿で対象とする「語彙的接辞」について規定しておく。語彙的接辞とは、具体的な概念を表す接辞のことである。「具体的な概念」とはなにかは、突き詰めて考えると、実は定義づけが難しい問題ではあるが⁵⁾、紙幅の関係上、ここでは踏み込まず、一般的に認識されている定義に従う。すると、語幹は語の主要部分として、実質的・語彙的意味を表すのに対し、接辞は語の補助的部分として、形式的・文法的意味を表すということになる。これに従えば、実質的・語彙的意味を表す接辞の存在は一般的ではない。

語彙的接辞には、名詞概念を表すもの、動詞概念を表すもの、副詞概念を表すもの

表1 ヌートカ語の語彙的接辞の分類 (中山 (2004) に基づき筆者が作成)

接続する 語幹の種類	支配タイプ		限定タイプ		
	動詞的用法	名詞的用法	場所表現	動詞的用法	副詞的用法
名詞語幹	●	○	○		
動詞語幹	●	○	○	○	○
数詞語幹		○			
場所語幹			○	○	

などが考えられるが、北米インディアン諸語に他の地域には見られないきわめて具体的な名詞概念を表わす接辞があることから、これを「語彙的接辞」とみなしている向きもある (Fortescue 1998, 亀井他編著 1996⁶)。

一方、中山 (2004) は、同じく北米インディアン諸語のひとつであるヌートカ語を扱いながら、より広い意味で語彙的接辞をとらえている。中山 (2004) は Sapir & Swadesh (1939) 等にならい、語彙的接辞を語の中で叙述の核として機能する「支配タイプ」と、語幹に意味的修飾を加える「限定タイプ」に分け、さらに、それぞれを表1のように下位分類している。この分類は、ヌートカ語を対象にしながら、ヌートカ語という個別言語にとどまらず、具体的概念を表わす接辞を包括的に網羅していると考えられるため、ここで紹介する。

中山 (2004) のこの分類に従うならば、コリヤーク語に見られるのは、支配タイプの動詞的用法、名詞的用法、限定タイプの副詞的用法である (表1の網掛け部分)。本稿では、このうち、支配タイプの、名詞語幹や動詞語幹について動詞的意味を表わす語彙的接辞 (表1の●部分) を考察の対象とする。以下では、特に断りがない限り、支配タイプで、動詞概念を表わす語彙的接辞を、便宜的に簡略化して「語彙的接辞」と呼ぶものとする。

3 コリヤーク語

3.1 名詞語幹につく語彙的接辞

コリヤーク語には、他動詞文のP項、自動詞文のS項にあたる名詞語幹、方向格名詞、道具格名詞語幹に接続し、具体的な動詞概念を表わす語彙的接辞がある (呉人 2001)。接頭辞は見られず、接尾辞がほとんどであるのに加えて、接周辞が1つだけ見られる。なかでも多いのはP項に接続するタイプ、すなわち、他動詞的な意味を持つ語彙的接辞である。また、これらは、自立語とは語源関係が特定できない、純然たる接辞である。ただし、これまで確認されているのは15足らずで、数的に見れば、後述するエスキモー語の語彙的接辞などにははるかに及ばない。以下、語彙的接辞の用例は、不定形 (-k)

で挙げる。

3.1.1 P項に接続する語彙的接辞

P項に相当する名詞語幹に接続する語彙的接辞には次のようなものがある。

-ŋel/-ŋal「採りに行く」:

iccu-ŋel-ə-k「灌木を採りに行く」, u-ŋel-ə-k「木を採りに行く」

-ŋta/-ŋəta「取ってくる」:

ott-ə-ŋta-k「木を取ってくる」, picy-ə-ŋta-k「食糧を取ってくる」

-u/-o「食べる, 飲む, 殺す」:

pont-o-k「肝臓を食べる」, caj-o-k「お茶を飲む」, kajŋ-u-k「熊を殺す⁷⁾」

te-..-ŋ/ta-..-ŋ「作る」:

ta-pla-ŋ-ə-k「ブーツを作る」, ta-ja-ŋ-ə-k「家を建てる」

-yili/-yele「探す」:

ʒujemətəwilʒ-ə-yili-k「人を捜す」, pəʒoŋ-yele-k「キノコを探す」

-ŋəjt「狩る」:

əlw-ə-ŋəjt-ə-k「野生トナカイを狩る」, kajŋ-ə-ŋəjt-ə-k「熊を狩る」

-tve/-tva「脱ぐ」:

li-tve-k「手袋を脱ぐ」, pəcaj-tva-k「ブーツを脱ぐ」

-yijke「(トナカイを橇牽引用に) 捕まえる/採集する」:

qoja-yijke-k「トナカイを捕まえる」, majoqla-yijke-k「野生タマネギを採集する」

P項に語彙的接辞が接続する場合には、自動詞活用することに注意されたい。(1 a) は語彙的接辞-u「食べる」による語例, (1 b) は対応する自立他動詞語幹 nu「食べる」による例文である。なお, 例文の人称代名詞で表わされるS項とA項は, 動詞の側で人称・数が標示され義務的ではないため, () で示す。

(1 a) (yəmmo) t-ənnətʃul-u-k-Ø.

1 SG,ABS 1 SG,S-fish,meat-eat-1SG,S-PFV

(1 b) (yəm-nan) t-ə-nu-n-Ø ənnətʃul-Ø.

1 SG-ERG 1 SG,A-E-eat-3SG,P-PFV fish,meat-ABS,SG

「私は魚肉を食べた」

ただし, 語彙的接辞と結びつく名詞が所有者などの属部を取る場合には, (2 a) のように語彙的接辞がそのまま名詞句と結合し, 動詞は自動詞活用することも, (2 b) のよ

うに語彙的接辞が主部名詞とのみ結合して他動詞活用する一方、属部名詞は動詞の外で絶対格形を取ることも可能である。

- (2 a) (yəmmo) t-ə-kmiŋ-ə-li-tve-k-Ø.
 1 SG,ABS 1 SG,S-E-child-E-mitten-take.off-1SG,S-PFV
- (2 a) (yəm-nan) kəmiŋ-ə-n t-ə-li-tve-n-Ø.
 1 SG-ERG child-E-ABS,SG 1 SG,A-E-mitten-take.off-3SG,P-PFV
 「私は子供の手袋を外した」

さらに、コリヤーク語には受益者が自動詞文においては与格で表わされる一方、他動詞文では目的語として絶対格で表わされうる、充当相に相当する構文がある。語彙的接辞による出名動詞においても、受益者が絶対格で表される場合には動詞は他動詞活用する。次の(3 a)は受益者が与格で表される自動詞文、(3 a)は充当相の他動詞文の例である。

- (3 a) (yəmmo) an' pec-ə-ŋ t-ə-voja-ŋijke-k-Ø.
 1 SG,ABS father-E-DAT 1 SG,S-E-reindeer-catch-1SG,S-PFV
- (3 b) (yəm-nan) en' pic-Ø t-ə-voja-ŋijke-n-Ø.
 1 SG-ERG father-ABS,SG 1 SG,A-E-reindeer-catch-3SG,P-PFV
 「私は父のために(乗用に)トナカイを捕まえた」

3.1.2 S項に接続する語彙的接辞

自動詞のS項に相当する名詞語幹に接続する語彙的接辞には、次のようなものがある。

- ŋtet/-ŋtat 「脱げる⁸⁾」:
 lili-ŋtet-ə-k 「手袋が外れる」, peŋke-ŋtet-ə-k 「帽子が脱げる」
- tuje/-toja 「ほどける」:
 talat-toja-k 「縄がほどける」, kitalat-toja-k 「三つ編みがほどける」
- juŋ/-joŋ 「始まる」:
 ano-juŋ-ə-k 「夏が始まる」, muqe-juŋ-ə-k 「雨が降り出す」

- (4) peŋke-ŋtet-i-Ø.
 hat-come.off-PFV-3SG,S
 「帽子が脱げた」

3.1.3 方向名詞に接続する語彙的接辞

方向名詞に接続する語彙的接辞としては、-jt「に行く」が確認されている。

-jt「に行く」:

kino-jt-ə-k「映画に行く」, bolinica-jt-ə-k「病院に行く」

- (5) (yəmmo) ecyi t-ə-bolinica-jt-ə-k-Ø.
1 SG.ABS today 1 SG.S-E-hospital-go.to-E-1SG.S-PFV
「私は今日、病院に行った」

3.1.4 道具名詞に接続する語彙的接辞

-lʃet「で行く」:

timi-lʃet-ə-k「丸太船で行く」, yekeŋ-ə-lʃat-ə-k「橇で行く」

- (6) ʃojacek-Ø ajyøve ŋelvəlʃ-etəŋ yekeŋ-ə-lʃat-e-Ø.
guy-ABS.SG yesterday reindeer.herd-ALL sledge-E-go.by-PFV-3SG.S
「男は昨日、トナカイの群れに橇で行った」

3.2 動詞語幹につく語彙的接辞

動詞語幹につく語彙的接辞には、移動の目的を表わす-lqiw/-lqew「～しに行く」がある。動詞語幹との複合語幹では、動詞語幹が従属部、これに接続される語彙的接辞のほうが主要部になる。

-lqiw/-lqew「～しに行く」:

ejeʃu-lqiv-ə-k「魚釣りに行く」, kalicit-ə-lqiv-ə-k「勉強しに行く」, elu-lqiv-ə-k「ベリー摘みに行く」

次の(7)では、接周辞 t-ŋ「作る」と ot「木」から作られた出名動詞語幹に-lqewが接続していることに注意されたい。

- (7) Ano-k mət-ko-t-ot-ə-ŋ-ə-lqew-la-ŋ
spring-LOC 1 PL,S-IPFV-make-wood-make-E-go-PL-IPFV
omk-etəŋ.
forest-ALL
「私たちは春に森に薪の準備をしに行く」

以下では、コリヤーク語に見られる上のような語彙的接辞が環北太平洋域の他言語にも見られるのか、また、見られるとしたら、コリヤーク語の語彙的接辞とどのような類似性と相違性があるのかを見ていく。

4 ツングース語族

本節では、コリヤーク語と同じく北東アジアに分布するツングース語族における語彙的接辞について見る。コリヤーク語はツングース語族の中では、エウエン語と隣接している。しかし、隣接していないツングース系の言語においても、コリヤーク語に見られると同様の語彙的接辞が観察されるようである。ただし、支配タイプの語彙的接辞に限られ、限定タイプの場所表現、動詞の用法はない(風間 2010)。風間(2010)によれば、ウデヘ語の支配タイプの語彙的接辞には次のようなものがある。これらはコリヤーク語同様、自立語幹とは語源の関係がたどれない純然たる接辞である。

4.1 名詞語幹につく語彙的接辞

風間(2010)は、名詞語幹につく語彙的接辞として次を挙げている。いずれもP項に接続する語彙的接辞である。

-ŋisi-⁹⁾「～を作る」:

ʃugdi-ŋisi- 「家を建てる」, unta-ŋisi- 「靴を作る」, lala-ŋisi- 「お粥を作る」

-mA- 「～を獲りに行く／～を採りに行く」:

oloxi-ma 「リスを獲りに行く」, olondo-mo 「朝鮮人参を採りに行く」

このうち、-mA- は、Nikolaeva & Tolskaya (2001) によれば、ikte-me- 「噛む」(ikte 「歯」), xoto-mo- 「町へ行く」(xoto 「町」) のような道具名詞や方向名詞にも接続する例も見られるという。さらに、Nikolaeva & Tolskaya (2001) では、「～を嗅ぐ」を意味する -mu:i- という語彙的接辞もあげられている。

-mu:i- 「～を嗅ぐ」:

sali-mu:i- 「死んだ魚の匂いを嗅ぐ」, siŋe-mu:i- 「ネズミの匂いを嗅ぐ」, b' ata-mu:i- 「少年の匂いを嗅ぐ」

- (8) Bi aziga-mu:i-mi.
me ɡirl-V¹⁰⁾-1SG

'I can smell girls.' (Nikolaeva & Tolskaya 2001: 295)

さらに、Novikova (1980:17-35) では、同系のエウエン語（オーラ方言）に、-lt（「～を作る」、-y「～を作る」、-lAč ~-lAt ~-nAč ~-nAt「～を持つ、～を使う、～である」、-ŋ「～を横取りする」、-tl「～を食べる」、-lb（「～を獲得する」、-m「～の匂いがする、～の味がする、～が痛む」、-mA「～を獲りに行く」、-lA「～を集めに行く、～を採りに行く」などの語彙的接辞があることが記述されている。

4.2 動詞語幹につく語彙的接辞

動詞語幹に接続する語彙的接辞としては、次の2つが挙げられている（風間 2010: 75）。

-nA- 「～しに行く」:

isə-nə- 「見に行く」 (< isə「見る」), gəə-nə- 「探しに行く」 (gələ「探す」), wa-ŋna- 「殺しに行く、獲りに行く」 (< waa「殺す、獲る」)

-sA- 「～して戻ってくる、～しに戻ってくる」:

xuli-sə- 「歩き回って戻ってくる」 (< xuli「歩き回る、行き来する」), gaj (i-sa- 「取りに戻ってくる」)

5 エスキモー語

次に、北米側のエスキモー語を見る。コリヤーク語が所属するチュクチ・カムチャツカ語族とエスキモー語は、長らく同系関係か、異系同士の影響関係かが議論されてきた。前者は Swadesh (1962) に代表され、後者は Boas (1929) に代表される。その是非については依然、決着がつかないままであるが、これは、両者の構造の大きな違いに起因していると考えられる。

Boas (1929) は、チュクチ・カムチャツカ語族のうちチュクチ語を取り上げ、その形式的特徴をめぐってエスキモー語と比較対照している。それによれば、チュクチ語には重複、接尾辞に加えて接頭辞¹¹⁾、母音調和、語頭の子音連続に関する厳密な制約などがあるのに対し、エスキモー語にはそれらの特徴がみられず、両言語は一般的な形式について言うならば、きわめて異なっている。しかし、Boas (1929) はその一方で、両言語が同じ複数接辞 -t を持つこと、極北地域では珍しく能格組織をともに持つこと、動詞の法体系が類似していることなどをあげ、これを影響関係によるものとしている。

Miyaoka (2012) によれば、エスキモー語の動詞の派生接辞には、名詞語幹から動詞を派生するタイプ (NV タイプ) と、動詞語幹から動詞を派生するタイプ (VV タイプ) がある。NV タイプはさらに、コピュラに相当する relational (equational) verbs (NVrv) を派生する独特な接辞と、上述の語彙的接辞に相当するような non-relational verbs を派生する動詞に分かれる (Miyaoka 2012: 981)。また、VV タイプの動詞派生接辞には、結合

価変更, 副詞の意味, テンス・アスペクト, モダリティ, 否定, 証拠性, 比較などを標示するものがある。

以下では, まず, NV タイプのうち, コリヤーク語などに相当する, non-relational verb を派生する語彙的接尾辞を見る。

5.1 名詞語幹につく語彙的接辞

エスキモー語にはこの種の語彙的接辞がきわめて多い。Miyaoka (2012) によれば, non-relational な NV タイプの語彙的接辞は大きく, ① 所有/存在/欠如, ② 動作動詞, ③ |li-| グループ, ④ 量/質/サイズ, ⑤ その他の5つのグループに分類できる。

なお, 以下のエスキモー語の表記については Miyaoka (2012) にしたがう。すなわち, 語彙的接辞のリストで示される | | は基底表示 (phonological representation) であることを示す。形態素初頭の - は, 前接する語幹末の軟口蓋摩擦音を脱落させることを示し, + は脱落させないことを示す。一方, 例文のイタリック表記は, 正書法によるものである。また, フォントの関係上, 一部の表記は対応する既存の IPA 表記に改めている。

5.1.1 所有・存在・欠如

このグループに属する接尾辞は, |+ŋiɜ-| 'to de-N, deprive N, have N removed' が二項動詞を派生し, 他動詞活用する以外は, すべて自動詞活用する一項動詞を派生する。

ŋqɕ- / ɜ- ~ +Ø-	'to have N, exist at [place]'
+taŋqɕ- / +taɜ-	'to exist (at the time, temporarily) at [place]'
+ŋit-	'to have no N, not exist, lack'
+tait-	'to have no N, not to exist, lack'
+ŋiɜuc-	'not to have any longer'
+tajɜuc-	'not to have any longer (now)'
ŋ*ɪ-	'to realize, acquire N'
+taŋi-	'to realize (now), acquire N (now)'
+ŋi (ka) ɜ-	'to have a cold (body part)'
+ŋicaɣ-	'to be need of N, lack N'
+ŋiɜ-	'to de-N, deprive N, have N removed'.

(9) は, 一項動詞派生 NV 接尾辞 |ŋqɕ-| 'to have N, exist at [place]'

(10) は二項動詞派生 NV 接辞 |+ŋiɜ-| 'to de-N, deprive N, have N removed' の例である。

5.1.3 | - li - |グループ

このグループは、 /li/ で始まる語彙的接尾辞からなる。

-li-	'to realize, make (for, out, of)'
-lic-	'to make/bring s.t. for, appear to s.o.'
-liq̄i-	'to catch a lot of (for)'
-liq̄i-	'to be afflicted in, (body part) be painful, experience'
-liuɣ-	'to deal with, play around, be occupied with, be cooking'
-liɣ-	'to supply with, to have plenty of'

(12a) では、|-li-| 'to realize, make (for, out, of)'' が名詞語幹 angy「ボート」に接続し、自動詞活用しているのに対し、(12b) では受益者の P 項が加わり他動詞活用している。

(12a) angya-li-uq		
boat-make-IND.3SG		
'He is making a boat.'		(Miyaoaka 2012: 1024)
(12b) angya-li-anga		
boat-make-IND.3SG.1SG		
'He is making me a boat.'		(Miyaoaka 2012: 1024)

5.1.4 量／質／サイズ

このグループには、次のような語彙的接尾辞が分類される。

-kiɣc(i)-	'to have a good/nice'
-ckiɣ-	'to have a very, just right'
-niɣ-	'to be a good, strong'
-niki-	'to consider to be pleasant (to)'
-niit- ~ +niat-	'to be bad, unpleasant'
-niɣq̄i-	'to be good, pleasant'
-tu-	'to be great in dimension, have much'
-k*it-	'to be small in dimension, have little'

(13a) (13b) は、いずれも |-kiɣc(i)-| 'to have a good/nice' の例であるが、(13a) は自動詞活用、(13b) は一人称単数が項として加わり、他動詞活用していることに注意されたい。

- (13a) tep-kegt-uq
 smell-have.good-IND.3SG
 'It smells good.' (Miyaoka 2012: 1034)
- (13b) tep-kegt-aanga
 smell-have.good-IND.3SG.1SG
 'It is making me (my clothing) smell good.' (Miyaoka 2012: 1034)

5.1.5 その他

その他の語彙的接尾辞には次のようなものがある。

+tuuma-	'(to be) in the state of being together with'
-kic-	'(suddenly) to appear, occur as'
+m(i)t- ~ + [person] n(i)t-	'to be at/in [someone's] (locative verb)'
+(t)muɣc- ~ +viɣc-	'to go to/toward'
+kua(ɣ)- / +kuiɣ- ~ +xuiɣ-	'to go (follow) by way of'

次の (14) は、方向名詞につく |+ (t)muɣc-| ~ |+viɣc-| 'to go to/toward' の例である。

- (14) ciu-tmurt-uq
 front-go.to-IND.3SG
 'He is going forward.' (Miyaoka 2012: 1042)

5.2 動詞語幹につく語彙的接尾辞

5.2.1 モダリティ

上述のとおり、コリヤーク語やツングース系の言語では、動詞語幹につく支配タイプの語彙的接尾辞は数が限られているが、エスキモー語では、この種の接尾辞も種類が豊富である。まずそのひとつは、Miyaoka (2012) でモダリティを表わすVV接尾辞に分類されているものの中に、コリヤーク語やツングース系言語、さらには、後述のヌートカ語にもみられる「～しに行く」の意味を表わす |+₁caɣ| / |+₁caɣtuɣ-| 'to go -ing, to go in order to' (Miyaoka 2012:1250) がある。モダリティを表わすVV接尾辞はこのほかにも、'to wish (to), tend to', 'to try to', 'to be tired of -ing', 'to be good' など多様な約20の接尾辞が挙げられているが、ここでは割愛する。(15) は、 |+₁caɣ| の例、(16) は |+₁caɣtuɣ-| の例である。

- (15) pissur-yar-tuq
 hunt-go-IND.3SG
 ‘He is going hunting.’ (Miyaoaka 2012: 1258)
- (16) [Qag-na qimugta] p petug-yartur-ru !
 outside-EX.ABS.SG dog.ABS.SG tie-go-OPT.2SG.3SG
 ‘Go and tie the dog out there (in motion, visible) !’ (Miyaoaka 2012: 1258)

5.2.2 階層的埋め込み構造

上記のような多様なモダリティを表わすVVタイプの接尾辞に加え、エスキモー語に特徴的なのは、階層的な埋め込み構造を生み出す接尾辞である。宮岡(1992)によれば、これには、-ni「と言う」、-suke「と思う」、-sqe「～するように頼む」のような接尾辞が含まれる。

- (17) ner-ni-yuk-aa
 食べる-言う-思う-IND.3SG.3SG
 「A1がPを食べたとA2が言ったとA3が思う」 (宮岡 1992: 29)
- (18) tuqu-y-uc-e-sqe-ssuk-ni-kii = wa
 死ぬ-動作主添加-受益者添加-挿入母音-頼む-思う-言う-分詞3単主.3単目 =
 叙述性¹²⁾
 「EのためにA1がPを殺してやるようにA2が頼んだとA3が思っていると
 A4が言う」 (宮岡 1992: 29-30)

6 スートカ語

中山(2004)によれば、カナダのバンクーバー西岸地域に分布するスートカ語には、400を超える語彙的接辞がある。上表で見ると、支配タイプ、限定タイプいずれの語彙的接辞も備えている。ただし、動詞的用法、名詞的用法は支配タイプに多く、場所的、副詞的用法は限定用法に多いというように、使用に相補分布的な偏りが見られる(中山 2004)。下では、支配タイプの動詞的用法を持つ語彙的接辞を名詞語幹に付加されるものと、動詞語幹に付加されるものに分けて見る。中山(2004)によれば、このタイプの接辞はテキストに現れる動詞的語彙的接辞の72.5%を占めるという。ただし、実際にこの種の接尾辞がいくつくらいあるのかは明らかではない。

6.1 名詞語幹につく語彙的接辞

スートカ語では、このタイプの語彙的接辞はP項に接続すると考えられるもの、S項

に接続すると考えられるものの2種類が観察される。

6.1.1 P項に接続する語彙的接辞

-hwa'ɬ「使う」, -'i·c「食べる, 飲む」, -n'a:h「追い求める」, -i:ɬ「作る」, -saλ「～の音を出す」, -(y)uʃaɬ「感じる」, -yuʔa:ɬ「～を知っている」, -maḥsa「～を望んでいる」

- (19) ʒuʔiiɕaɬat,
ʒuʔi-'i·c-'ap-'at
薬-食べる-CAUS-SHIFT
「私に薬を飲ませて…」 (中山 2004:7)

- (20) ɕaapaciiɬʔaλquu,
ɕapac-i:ɬ-'aλ-qu:
カヌー-感じる-FINITE
「彼らはカヌーを見つけた」 (中山 2004:7)

また, 中山 (2004) ではあげられていないが, スートカ語では, 「～のためにポトラッチを催す」「～がうまくなるように儀式を行なう」(亀井他編著 1996: 515) などの語彙的接辞もあるようである。

6.1.2 S項に接続する語彙的接辞

中山 (2004) は, 名詞語幹に付加される動詞概念をもつこのタイプの語彙的接辞は, 意味上, 名詞語幹が表わすものを概念的目的語として取るとしているが, 用例があげられていないため断定はできない。しかし, -'atu「沈む」はこの訳が正しいとすれば, S項にあたる名詞語幹を取るのではないかと思われる。

6.2 動詞語幹につく語彙的接辞

このタイプの語彙的接辞には次のものがある。

-'as「～するために行く」, -'i:ɬ「～を得ようとする」

- (21) kuuɕiʔas
ku:ɕiɬ-'as
魚をおろす-～するために行く
「干物を作りに行く」 (中山 2004:8)

- (22) wik haaʔaaʔiih,
 wik haʔa-ʔi:h
 否定 払う〜を得ようとする
 「代償を得ようとしてやるのではなく…」 (中山 2004:8)

7 おわりに

以上、ウデヘ語、エウエン語、コリヤーク語、エスキモー語、ヌートカ語に見られる、名詞語幹あるいは動詞語幹に付加される支配タイプの、動詞概念をもつ語彙的接辞について概観した。それにより、次のような共通点と相違点が見えてきた。

<共通点>

- ① いずれの言語にも支配タイプの、名詞語幹に付加される動詞的な語彙的接辞がある。また、その多くは、P項に相当する名詞語幹に付加されるものである。
- ② いずれの言語にも「作る」「食べる」を意味する動詞的な語彙的接辞がある。また、「狩る」あるいは「狩りにいく」は3言語（ツングース語、コリヤーク語、エスキモー語）で確認されたが、ヌートカ語にもある可能性がある。
- ③ いずれの言語にも動詞語幹につき「〜しに行く」を意味する語彙的接辞がある。

<相違点>

- ④ ツングース系諸言語やコリヤーク語に比べると、エスキモー語は動詞的な語彙的接辞がはるかに豊富である。ただし、ヌートカ語については語彙的接辞を網羅した文献に当たっていないために、どの程度あるのか確かなことはいえない。
- ⑤ エスキモー語には他の言語には見られないような、多層的な埋め込み構造を生む語彙的接辞がある。
- ⑥ コリヤーク語もエスキモー語も複統合的な言語であるが、エスキモー語が純粋な接尾辞型言語であるのに対し、コリヤーク語は抱合が発達しており、語彙的接辞と動詞語幹の抱合が相補的に機能しているために、コリヤーク語ではエスキモー語ほどには語彙的接辞が発達していないと考えられる。

①②③の共通点がほぼ4言語すべてに見られることから、このような類似が系統関係を越えたものであることは間違いない。ただし、これが言語領域的な特徴なのか、あるいはより一般的な特徴なのかについては、さらに広い通言語的な調査が必要である¹³⁾。相違点は主に、コリヤーク語とエスキモー語との違いに着目している。両言語とも複統合的な言語であるが、コリヤーク語では複合度を高めるのに、接辞のみならず抱合が生産的に利用されている。一方、エスキモー語はもっぱら接尾辞が派生も屈折も担ってい

る。また、エスキモー語に顕著なのは派生接辞の豊富さのみならず、統辞論的な複雑さである。

環北太平洋域の諸言語のより広い通言語的な対照により、語彙的接辞と複統合性の関係についても明らかになる可能性がある。

【略語表】

A = agent-like argument	ABS = absolutive	ALL = allative
APL = applicative	CAUS = causative	DAT = dative
E = epenthetic	ERG = ergative	EX = root expander
FINITE = finite	IND = indicative	IPFV = imperfective
LOC = locative	OPT = optative	P = patient-like argument
PFV = perfective	PL = plural	S = single argument
SG = singular		

注

- 1) 本書でいう「エスキモー語」とは、南西アラスカのユピック (Yupik) エスキモー語を指す。
- 2) この地域はまた、民族学的見地から、その伝統的生活様式の特異性により他地域の狩猟採集民と区別される狩猟採集民の一大文化圏として、「北太平洋沿岸狩猟採集民文化圏」、略して、「北太平洋沿岸文化圏」(渡辺仁 1992: 69) と呼ばれている。
- 3) チュクチ・カムチャツカ語族と北米諸言語との関係についての詳細は渡辺己 (1992) を参照されたい。
- 4) 「環北太平洋域」を提唱した宮岡 (1992) では、語彙的接辞も取り上げられているものの、実際に言及されているのは北米インディアン諸語の語彙的接辞であり、アジア側の語彙的接辞については触れられていない。また、風間 (2010) ではアジア側のツングース系諸言語の語彙的接辞が北米インディアン諸語のヌートカ語の語彙的接辞と対照されているが、環北太平洋域を見渡した考察ではない。
- 5) ちなみに、風間 (2010) はこの問題について、接辞は本来、元の語と派生された語の仲介をするものと考えべきであり、独立語の概念がもつ具体性と、接辞のもつそれとは同一視できないし、具体性というのもそもそも相対的な問題であり、言語によっても異なるとしている。
- 6) 亀井他編著 (1996: 515) は、「語彙的接尾辞 lexical suffix」の項で、「名詞的接辞 nominal suffix」とも言うとしている。一方、動詞的な意味を表わすものは、「きわめて具体的な概念を表わし、それが故に語彙的接辞ということもできる数多くの接辞」と、あいまいな表現をしている。
- 7) 一方、「熊肉を食べる」という意味を表すには、「熊」に「～の断片」を意味する接尾辞-tʃul を接続してから-u を付加した kajŋ-ə-tʃul-u-k という動詞が用いられる。
- 8) この接尾辞は、次の例文にみるように、逆使役接尾辞と同じ形式であることに注意されたい。
(a) は、他動詞文、(b) は対応する逆使役の自動詞文である。当該の逆使役接尾辞は (b) のイタリック部分。

- (a) Mik-ne-k amu ya-cc-ə-lin-Ø kəltəyij-ə-n
 who-AN-LOC (ERG) probably RES-untie-E-3SG,P-3SG,A knot-E-ABS,SG
 「どうやら誰かがずっと前に櫓の結び目をほどいたようだ」
- (b) Amu ya-cc-ə-ŋtal-lin kəltəyij-ə-n.
 probably RES-untie-E-AC-3SG,S knot-E-ABS,SG
 「櫓の結び目はどうやらずっと前にほどけたようだ」

- 9) 形態素のハイフンのつけ方は、コリヤーク語とは異なるが、直さずに、それぞれの文献の方式に従う。
- 10) V は, verbal derivational affix の略 (Nikolaeva & Tolskaya 2001: xiii)。
- 11) チュクチ語 (コリヤーク語も同様) には, この他, 語幹の前後についてひとまとまりの機能・意味を表わす接周辞 (circumfix) があるが, Boas (1929) では言及されていない。
- 12) 宮岡 (1992: 30) は = wa は, 「分詞に叙述的な力をあたえる」とされているが, ここでは紙幅の関係上, 「叙述性」とする。
- 13) 風間 (2010) は, 移動と目的を表わす動詞の意味的・認知的な結びつきの強さが, この地域だけではない, 通言語的な特徴である可能性があることを, 塩原 (2006) のスンバワ語の例などから示唆している。

引用・参考文献

(和文)

風間伸次郎

- 2010 「ツングース諸語における統合度について—ツングース諸語に『語彙的接辞』はあるか? そもそも語彙的接辞とは何か?」呉人恵編『環北太平洋の言語 (15)』pp. 71-82, 富山: 富山大学人文学部。

亀井孝・河野六郎・千野栄一編著

- 1996 『言語学大辞典 第6巻 述語編』東京: 三省堂。

呉人 恵

- 2001 「コリヤーク語の出名動詞と名詞抱合」津曲敏郎編『環北太平洋の言語 (7)』pp. 101-124, 札幌: 北海道大学大学院文学研究科。

塩原朝子

- 2006 「スンバワ語の『移動とその目的』を表す動詞連続構文」『アジア・アフリカの言語と言語学』1: 45-58。

中山俊秀

- 2004 「ヌートカ語における複統合性について—語彙的接辞の用法から」津曲敏郎編『環北太平洋の言語 (11)』pp. 1-13, 札幌: 北海道大学大学院文学研究科。

宮岡伯人

- 1992 「環北太平洋の言語」宮岡伯人編『北の言語—類型と歴史』pp. 3-65, 東京: 三省堂。

渡辺 己

- 1992 「新旧両大陸の要—チュクチ・カムチャツカ語族」宮岡伯人編『北の言語: 類型と歴史』pp. 147-163, 東京: 三省堂。

渡辺 仁

- 1992 「北洋沿岸文化圏—狩猟採集民文化の共通性とその解釈問題」『北の言語：類型と歴史』pp. 67-107, 東京：三省堂。

(欧文)

Boas, Franz

- 1929 Classification of American Indian Languages, *Language* 5 (1) : 1-7.

Fortescue, Michael

- 1998 *Language Relations across Bering Strait: Reappraising the Archaeological and Linguistic Evidence*. London: Cassell.

Jochelson, Waldemar

- 1928 *Peoples of Asiatic Russia*. New York: American Museum of Natural History.

Miyaoka, Osahito

- 2012 *A Grammar of Central Alaskan Yupik (CAY)* (Mouton Grammar Library 58). Berlin: Mouton de Gruyter.

Nikolaeva, Irina and Tolskaya, Maria

- 2001 *A Grammar of Udihe* (Mouton Grammar Library 22). Berlin: Mouton de Gruyter.

Novikova, K. A.

- 1980 *Očerki Dialektov Evenskogo Jazyka, Ol'skij Govor*. Leningrad: Nauka.

Sapir, Edward & Swadesh, Morris

- 1939 *Nootka Text: Tales and Ethnological Narratives with Grammatical Notes and Lexical Materials*. (William Dwight Whitney Linguistic Series) (Linguistic Society of America, University of Pennsylvania, Philadelphia, Pennsylvania: rpt., AMS Press, New York 1978).

Swadesh, Morris

- 1962 Linguistic Relations across Bering Strait, *American Anthropologist* 64 (6) : 1262-1291.